

アフォーダンスに基づく発話解釈¹ — 「行為の難易度」を表わす形容詞文—

仲本康一郎

1. はじめに —形容詞文の解釈と「日常的推論」

形式論理と異なる「日常的推論」は、近年、認知心理学や人工知能の分野で、帰納推論や確率推論、アナロジー等の研究として脚光を浴びている(市川 1997)。これに対して、日常言語で用いられる推論の研究は、まだほとんど行われていない。²本稿は、発話解釈(特に、形容詞文の解釈)に用いられる日常的推論を、認知意味論(特に、フレーム意味論)の観点から考察することを目的とする。

形容詞(文)³は、一般に、「属性」を表わすとされる(Croft 1991)が、そのような「属性」に基づく一義的な規定で形容詞文の解釈を表現することはかなり難しい(Langacker 1995)。そこで、本稿は、形容詞文の解釈において、何らかのイベント(特に、主体的行為)の成立可能性(アフォーダンス)が問題になる場合に注目し、そのような解釈を語用論的な推論パターンとして表現する方法を提案する。

本稿は、フレーム意味論に立脚し、「属性」を表わす形容詞文の語用論的な解釈装置として、次の二つの概念を提案する。

- ・イベントフレームの喚起
- ・アフォーダンスに基づく解釈

2. イベントフレームの喚起

2.1. フレーム意味論と形容詞文の解釈

フレーム(frame)は、Fillmore(1982)の「フレーム意味論」で提案された概念であり、「いかなる概念を理解するときも、それを包含する全体構造を理解する必要がある」というテーゼのもとに用いられている。例えば、「斜辺」という語は「直角三角形」というフレームのもとで意味を持つ。⁴

本稿は、形容詞文の解釈において、「行為」や「出来事」等⁵のイベントフレーム(event frame)⁶が喚起される現象に焦点をあてる。形容詞文は、プロトタイプの、「属性」を表わすとされており(Croft 1991:55,65)、それらの解釈におけるイベントの重要性は、特定の形容詞を除いて、まだあまり指摘されていない(Langacker 1995)。⁷

2.2. イベントフレームと形容詞文の諸相

形容詞文が、単なる「モノの属性」を表わす場合、イベントフレームの喚起は必要とされない。例えば、「リンゴは赤い」「ボールは丸い」のように、モノの属性（色彩や形状）を述べる形容詞文は、「属性」に基づく規定で十分であろう。これに対して、以下に挙げる二つのタイプの形容詞文は、それぞれ、意味論的／語用論的にイベントフレームの喚起を必要とする。

2.2.1. 意味論的にイベントを修飾する形容詞文

第一に、「行為の難易」「運動の時期・速度」に言及する形容詞は、意味的に「イベントの属性」を表わすため、主語名詞がモノ的な名詞の場合、イベントの喚起が必要となる。例えば、(1)は、主語名詞の持つ何らかの語彙情報によって、「運転」「起床」などのフレームが喚起されて自然な解釈が成立する。これに対し、(2)は、そのようなフレームを喚起しにくいいため自然な解釈が成立しない。⁸

- (1) a. この車は 難しい → この車は 運転が 難しい
b. あの人は はやい → あの人は 起床が はやい
(2) a. ?あの星は 難しい b. ?この木は はやい

2.2.2. 語用論的にイベントを修飾する形容詞文

第二に、形容詞文の解釈が、語用論的にイベントの概念を必要とする場合がある。例えば、(3)のような形容詞文に比べて、(4)は、単なる「パンのかたさ」「牛乳の古さ」という属性だけでなく、主語名詞と形容詞の持つ何らかの語彙情報から、「パンを食べる」「牛乳がくさる」などのイベントが喚起され、それぞれ、イベントの「成立可能性」や「局面」を表わすことによって自然な解釈が成立する。

- (3) a. この鉱石は かたい b. この建物は ふるい
(4) a. パンが かたい → パンを食べにくい
b. 牛乳が ふるい → 牛乳がくさりかけだ

3. アフォーダンスに基づく発話解釈 — 形容詞文の解釈

本稿は、上記の(4)のように、形容詞文が語用論的にイベントフレームの喚起を要求し、そのようなイベントの成立可能性を問題にする場合をとりあげる。⁹

3.1. 先行研究 — 「重い」の解釈をめぐって

まず、新地 (1997) を参考に、形容詞「重い」の解釈について考えてみたい。「重い」は、基本的に「属性」を表わすだけでなく、何らかの行為の成立可能性を表わす。次の文で、前者は、イベントとして「荷物を運ぶ、持ち上げる」等の行為を喚起し、そのような行為の成立可能性を表わす。また、後者は、ギア自体の属性でなく、「動かしにくい」という行為の成立可能性が前景化されている。

- (7) a. 荷物が 重い → 荷物を運びにくい
b. ギアが 重い → ギアを動かしにくい [ibid.:79]

このように、「重い」は、単に「目方がある」という属性だけでなく、何らかの行為の成立可能性を表わす。新地は、このような用法を観察し、「重い」のプロトタイプを、次のような二つの様相で表している。

- (8) 「重い」のプロトタイプの意味：
a. 重量による上から下への力がかかっている
b. ものを動かすときに動かしにくい [ibid.:80]

前者が属性的意味を、後者がアフォーダンス的解釈にあたる。新地は、これらを共に意味の問題として扱っているが、本稿は、後者を語用論的推論として一般化する。というのも、このような解釈は、「この荷物は、重いけれど運びやすい」のように却下可能であり、また、属性を表わす形容詞文一般に適用される解釈だからである。¹⁰

3.2. アフォーダンスに基づく推論 — 属性からイベントへ

アフォーダンスは、Gibson (1985:137-57) の知覚の理論で提案された概念であり、環境が生体に提供する情報、特に、特定の生体の「行為の成立可能性」に関する情報と定義される。以下は、佐伯他 (1991) によるアフォーダンスの定義である。¹¹

- (9) ものごとの知覚というのは、環境のなかの事物の属性、すなわち、外界がその生体の活動を誘発したり方向づけたりする性質を「直接に引き出している」ということになる。ギブソンは、そのような「生体の活動を方向づける性質」をアフォーダンス (affordance)」と名付けた。 [佐伯他 1991:11]

ここで大切なことは、アフォーダンスは、生体の活動、つまり、「主体の行為」の関わりで存在する、環境のなかの「対象の属性」であるという点である。したがって、アフォーダンスは「属性からイベントへ」の推論として、次のように表現される。¹²

(10) アフォーダンスに基づく推論：

属性 (x) \Rightarrow + / - アフォード (イベント (主体, x, ...))

これは、「ある対象 x が、ある属性を持つことによって、x と何らかの関わりのあるイベントの成立を促進 (+) / 阻害 (-) すること、つまり、イベント (特に、主体の行為) の成立可能性を推論すること」を表している。¹³

また、ある属性が何らかのイベントの成立を促進する場合、その属性はイベント (の成立) をアフォードする、または、「正のアフォーダンス」を持つといい、逆に、ある属性がイベントの成立を阻害する場合、その属性はイベント (の成立) をアフォードしない、あるいは、「負のアフォーダンス」を持つという。

3.3. 推論の領域固有性と解釈の傾向

近年の認知心理学の重要なメッセージのひとつとして、「日常的推論」は、形式論理と異なり、特定の文脈で活性化されるという推論の領域固有性 (domain specificity) という特徴を持っているという主張がある (市川 1997:22-31)。本稿の提案するアフォーダンスに基づく推論も、「属性」を表わす形容詞文に一般の推論として定式化されるが、すべての形容詞文に一律に適用されるわけではない。

第一に、アフォーダンスに基づく推論は、「行為 x が可能となるために、属性 y (前提) が満たされる必要がある」という、いわば“可能スキーマ”のもとで活性化される推論であって、「文脈的情報」として、特定の行為に対する「希望・意志」や「責任・義務」等がある場合に適用されやすい。この意味で、アフォーダンスに基づく推論は、認知心理学でいう「実用論的推論スキーマ」の一種といえる (Holland et al. 1991:318-21)。

第二に、アフォーダンスに基づく推論は、「語彙的情報」として、特定の行為のアフォーダンスを誘因しやすい形容詞類によって活性化される。本稿は、このような語彙的情報に基づく“解釈の傾向”として、人間の基本的な認知を反映すると考えられる三つの形容詞類「力学形容詞」「空間形容詞」「数量形容詞」が誘引するアフォーダンス的解釈の傾向に焦点をあてる。¹⁴

4. 力学形容詞 のアフォーダンス

「力学形容詞」は、身体的「圧覚」を反映する形容詞で、おおざっぱに、「抵抗力」を表わす主体形容詞と「攻撃力」を表わす対象形容詞がある（仲本 1999:10）。

- (11) a. 対象形容詞： かたい／やわらかい／もろい、重い／軽い
b. 主体形容詞： 鋭い／鈍い、きつい／ゆるい、厳しい／優しい

力学形容詞は一般に、観察不可能な属性であり、何らかの運動・行為の関連で相対的に判断される。例えば、物体の抵抗力を表わす「かたい」という属性は、たたいてもこわれぬ等の経験によって認識される。このように、力学形容詞は、特定の運動・行為のフレームを持っており、アフォーダンスを表しやすい。本稿は、代表的な力学形容詞として、「かたい」（と「重い」と「鋭い」）を取りあげる。

4.1. 抵抗力：「かたい」のアフォーダンス

抵抗力を表わす対象形容詞「かたい」は、基本的に「属性」を表わすだけでなく、特定の行為に対する「対象のアフォーダンス」¹⁵を表わす。次の文で、前者はイベントとして「パンを裂く、食べる」という行為を喚起し、負のアフォーダンスを表わす。また、後者は「ネジ」の属性でなく「ネジを回しにくい」という負のアフォーダンスだけが前景化されている。前者の解釈は、(13) のように表示される。

- (12) a. パンがかたい b. ネジが かたい¹⁶
(13) かたい (パン) ⇒ -アフォード (裂く (主体, パン))

このように、「かたい」は、何らかの行為に対する対象のアフォーダンスを表わす。また、「かたい」の喚起するイベントは、一般に、「切る」「割る」等の「破壊行為」や、「曲げる」「伸ばす」等の「変形行為」である（靑山 1994:74）。したがって、「かたい」のアフォーダンスは以下のような語彙的なタイプとして指定される。同様に抵抗力を表わす「重い」のアフォーダンスも対照させた。

- (14) 「かたい」の典型的アフォーダンス：
a. 硬度 (対象) ⇒ -アフォード (破壊／変形 (主体, 対象))¹⁷
b. イベントフレーム： 「切る」「割る」「曲げる」「伸ばす」

(15) 「重い」の典型的アフォーダンス：

- a. 重量 (対象) ⇒ -アフォーダンス (移動/運搬 (主体, 対象))
- b. イベントフレーム：「動かす」「持ち上げる」

4.2. 攻撃力：「鋭い」のアフォーダンス

「攻撃力」を表わす主体形容詞「鋭い」は、基本的に「尖っている」という形状を表わす形容詞であるが、何らかの行為に対する「動作主¹⁸や道具のアフォーダンス」も表わす。次の文で、前者はイベントとして「切る」「刺す」という行為を喚起し、正のアフォーダンスを表わす。これに対して、後者はそのような行為を喚起しないため解釈が困難となっている。前者の解釈は、(17) のように表示される。

(16) a. この刃は 鋭い b. ?この塔は 鋭い¹⁹

(17) 鋭い (この刃) ⇒ +アフォーダンス (切る (この刃, 対象))

このように、「鋭い」は、「尖っている」という形状属性だけでなく、何らかの行為に対する動作主・道具のアフォーダンスを表わす。また、「鋭い」の喚起するイベントは、「かたい」の喚起するイベントほど一般的でないが、同様に「切る」「刺す」等の「破壊行為」である。したがって、「鋭い」のアフォーダンスは以下のような語彙的なタイプとして指定される。

(18) 「鋭い」の典型的アフォーダンス：

- a. 形状 (道具) ⇒ +アフォーダンス (破壊 (道具, 対象))
- b. イベントフレーム：「切る」「刺す」

4.3. 力学形容詞の拡張的用法

力学形容詞は、互いに類似の意味的拡張をたどるひとつの自然類を形成しており、アフォーダンス的解釈は、このような拡張的用法において色濃く残っている。

4.3.1. 心理的-社会的用法

第一に、力学形容詞は、次のような慣用句や比喩表現に観察されるように、心理的-社会的な領域において、特定の行為に対するアフォーダンスを表わす。

- (19) a. 口がかたい → なかなか秘密を言わない [初山 1994:77]
 b. 腰がおもい → なかなか行動に移さない [新地 1997:88]
- (20) a. あなたの業を主にゆだねれば計らうことはかたく立つ。(箴言 7:13)
 b. あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように
 心をかたくなにしてはならない。(詩編 95:8)
 c. 疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませて
 あげよう。(中略) わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いから
 である。(マタイの福音書 11:28-30)
 d. 神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神
 と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見
 分けることができます。(ヘブライ人への手紙 4:12)

4.3.2. 抽象的用法 - 「行為の難易度」

第二に、力学形容詞は、属性という概念を完全に希薄化し、行為のアフォーダンスだけを問題にする抽象的用法に拡張される。²⁰ こうした「行為の難易度」を表わす用法は、言語普遍的に力学形容詞によって表わされる傾向がある。例えば、英語や仏語は、「かたい」にあたる *hard/tough* や *dur* が「困難」を表わす。また、独語は、「重い」と「軽い」にあたる *schwer* と *leicht* が「困難」と「容易」を表わす。²¹

- (21) a. 課題は かるい/やさしい → 課題の克服は「容易」である
 b. 課題は きつい/きびしい → 課題の克服は「困難」である
 c. 早起きは かるい → 早起きは「容易」である
 d. 山登りは きつい → 山登りは「困難」である

5. 空間形容詞のアフォーダンス

「空間形容詞」は、空間的な位置や規模を表わし、次のように、大きくモノや場所の「位置」を表わす形容詞と、「規模」を表わす形容詞に分けられる。

(22) 日本語の空間形容詞の具体例：

- a. 位置形容詞： 高い/低い、深い/浅い、遠い/近い
 b. 規模形容詞： 大きい/小さい、広い/狭い (、長い/短い)

空間形容詞は、単なる観察に基づく属性でなく、何らかの運動・行為の関連で相対的に判断される。例えば、場所の位置を表わす「遠い／近い」という属性は、その場所まで歩いてみる、手を延べてみる等の経験によって認識される。このように、空間形容詞は、特定の運動・行為のフレームを持っており、アフォーダンスを表しやすい。

空間形容詞は、一般に、力学形容詞のように、アフォーダンス的解釈が語彙化されていることは少ないが、幾つかの基本的な「空間スキーマ」に基づく典型的なアフォーダンスを表わすという傾向がある。

5.1. 位置形容詞 - 到達のアフォーダンス

「位置形容詞」は、一般に、主語名詞＝目標と解釈される場合、空間的な「起点／経路／目標のスキーマ (Lakoff 1987:275)」が喚起され、「目標」の到達可能性 (accessibility) という「目標のアフォーダンス」を表わす傾向がある。次の文は、単なる「戸棚」「学校」の客観的な距離を表わすのではなく、「戸棚」「学校」の到達可能性というアフォーダンスを表している。これらは、(24) のように表示される。

- (23) a. 戸棚が 高い b. 学校が 遠い
- (24) a. 高い (戸棚) ⇒ -アフォード (届く ((主体の) 手, 戸棚))
 b. 遠い (学校) ⇒ -アフォード (通う (主体, 学校))

このように、位置形容詞は、主語名詞＝目標と解釈された場合、「遠近のスキーマ」のもとに〈到達のアフォーダンス〉を表わす傾向がある。²³

(25) 位置形容詞の典型的アフォーダンス:

- a. 位置 (目標) ⇒ -/+アフォード (到達 (主体, 目標))
 b. イベントフレーム: 「行く」「来る」「着く」「(手/足が) 届く」

5.2. 規模形容詞 - 収容のアフォーダンス

「規模形容詞」は、一般に、主語名詞＝容器と解釈される場合²³、空間的な「容器のスキーマ (Lakoff 1987:272)」が喚起され、「容器」の収容能力 (capacity) という「場所のアフォーダンス」を表わす傾向がある。次の文は、単なる「押入」「会場」の客観的な規模を表わすのではなく、「押入」「会場」の「収容能力」というアフォーダンスを表している。これらは、(27) のように表示される。²⁴

- (26) a. 押入が 小さい b. 会場が 狭い
(27) a. 小さい (押入) ⇒ -アフォード (入れる (押入, もの))
 b. 狭い (会場) ⇒ -アフォード (入る (会場, ひと))

このように、規模形容詞は、主語名詞=容器と解釈される場合、「容器のスキーマ」のもとに〈収容のアフォーダンス〉を表わす傾向がある。²⁵

(28) 規模形容詞の典型的アフォーダンス:

- a. 規模 (容器) ⇒ +/-アフォード (収容 (容器, 中身))
b. イベントフレーム: 「入れる」「入る」「載せる」「乗る」

5.3. 空間形容詞の拡張的用法

5.3.1. 心理的・社会的用法

力学形容詞と同様、空間形容詞も、次のような比喻表現に観察されるように、心理的・社会的な領域において特定の行為に対するアフォーダンスを表わす。興味深い例として、(30) は、主体側の「手の長さ」によって、「到達可能性」を表している。²⁶

- (29) 狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見出す者は少ない。(マタイの福音書 7:13)
- (30) 「主の手が短くて救えないのではない。

主の耳が鈍くて聞こえないのでもない」(イザヤ書 59:1,2)

5.3.2. 抽象的用法 - 「行為の難易度」

また、「遠い/近い」は、(31a) のように抽象的な目標に対する「到達可能性」を表わす用法や、(31b) のような「行為の難易度」を表わす用法も持つが、力学形容詞ほど一般化されていない。また、「人生は旅である」に代表されるより具体的な「道のメタファー (瀬戸 1995:121-45)」が喚起される場合、(31c) のように「険しい/平坦だ」等の「経路」の状態を表わす形容詞が「到達可能性」を表わす。

- (31) a. レギュラーは まだ遠いな → レギュラー昇格は「困難」である
 b. 日本の真の国際化は 遠い → 日本の国際化は「困難」である

c. 平和への道のりは 険しい → 平和の実現は「困難」である

6. 数量形容詞のアフォーダンス

「数量形容詞」は、「ものの数量」を表わし、基本的に観察に基づく属性であるが、幾つかの特定の行為の関連で相対的に判断されることがある。例えば、代表的な数量形容詞「多い／少ない」は、絶対的な数量でなく、対象に対する遭遇の機会や数量に対する満足の経験によって相対的に判断されることがある。したがって、数量形容詞も、特定の行為や経験²⁷のフレームを持っており、アフォーダンスを表しやすい。

6.1. 数量形容詞 - 遭遇のアフォーダンス

第一に、数量形容詞は、主語名詞や形容詞から何らかの「遭遇の経験」が喚起される場合、そのような経験に対する「対象のアフォーダンス」を表わす傾向がある。次の文は、単なる「今年の雪」の絶対的な量を表わすのではなく、「今年は雪を見ない」という「遭遇」のアフォーダンスを表している。これは、(33)のように表示される。また、このような解釈を意味的に内在化させた数量形容詞として、「珍しい」がある。

(32) 今年は 雪が少ない 参考) 今年は 雪が珍しい

(33) 少ない (雪) ⇒ -アフォード (見る (主体, 雪))

このように、数量形容詞は、主語名詞や形容詞から何らかの「遭遇」の経験が喚起される場合、(遭遇のアフォーダンス)を表わす傾向がある。²⁸

(34) 数量形容詞の典型的アフォーダンス1 :

a. 数量 (対象) ⇒ +/-アフォード (遭遇 (主体, 対象))

b. イベントフレーム: 「見る」「会う」「発見する」

6.2. 数量形容詞 - 満足のアフォーダンス

第二に、数量形容詞は、主語名詞や形容詞から何らかの「満足の経験」が喚起される場合、そのような経験に対する「対象のアフォーダンス」を表わす傾向がある。²⁹次の文は、単なる「今年の雨」の絶対的な量を表わすだけでなく、「今年は雨が足りない」という「満足」のアフォーダンスを表している。これは、(36)のように表示される。また、このような解釈を意味的に内在化させた数量形容詞として、「乏しい」がある。

(35) 今年は 雨が少ない 参考) 今年は 雨が乏しい

(36) 少ない (雨) ⇒ -アフォード (足りる (主体, 雨))

このように、数量形容詞は、主語名詞や形容詞から何らかの「満足」の経験が喚起される場合、〈満足のアフォードランス〉を表わす傾向がある。

(37) 数量形容詞の典型的アフォードランス 2 :

a. 数量 (対象) ⇒ + / -アフォード (満足 (主体, 対象))

b. イベントフレーム : 「足りる」「満たす」「満足する」

7. アフォードランスに基づく解釈の誘因

7.1. 「相対化」と解釈の誘因

最後に、アフォードランス的解釈の「誘因現象³⁰」を観察したい。第一に、アフォードランス的解釈は、次のように「行為」や「行為の主体」を前景化し、「属性」と「行為のアフォードランス」の相対的關係を成立させること (相対化) によって誘引される。

(38) a. 行為の導入 : この肉は 食べるには かたい

b. 主体の導入 : この肉は 年寄りには かたい

7.2. 評価性の導入と解釈の誘因

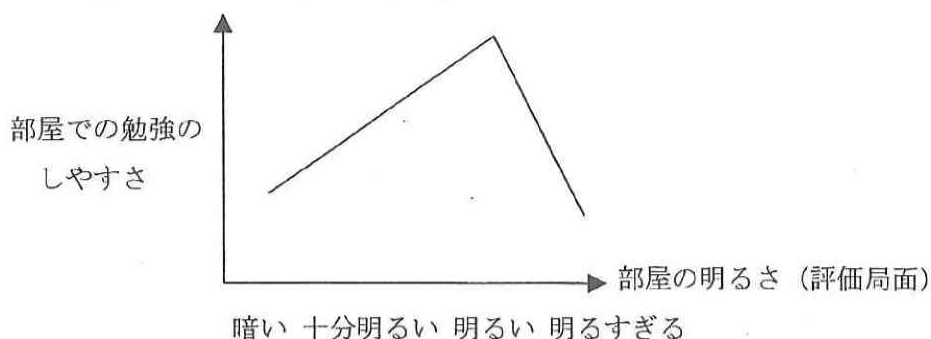
第二に、「評価性」の導入に基づく解釈の誘因もある。これは、人間が一般に、評価の基準として行為のアフォードランスを用いる傾向による。形容詞の評価局面は、「相関関係」³¹を表わす「十分」「すぎる」等の付加によって導入される。³²例えば、「十分明るい」「明るすぎる」という表現は、「明るい」という属性内に、(40)の横軸のような評価局面を構成し、もうひとつの軸に行為のアフォードランスを導入する傾向がある。

一般に、「十分+形容詞」は正のアフォードランスを、反対に、「形容詞+すぎる」は負のアフォードランスを誘因する。(39)において、前者は、「読書」「勉強」などの何らかの行為に対して、「明るい」という属性が十分であり、そのような行為をアフォードすることを表わす。反対に、後者は、「明るい」という属性がすぎており、そのような行為をアフォードしないことを表わす。(40)の図は、「明るさ」と「行為のアフォードランス」の相関関係を図示したものである。

(39) a. この部屋は 十分明るい ⇒ +アフォード (読書/勉強 (主体, 部屋))

b. この部屋は 明るすぎる ⇒ -アフォード (読書/勉強 (主体, 部屋))

(40) 「十分」と「すぎる」の相関関数



8. おわりに - 本稿のまとめ

本稿は、形容詞文が、一般に、「属性」を表わすだけでなく、イベントの成立可能性 (=アフォードダンス) として「相対的」に解釈される傾向があることを指摘し、このような解釈を語用論的な二つの解釈装置によって表現する方法を提案した。

・イベントフレームの喚起 ・アフォードダンスに基づく推論

具体的な形容詞文として、人間の基本的認知を反映する三つの形容詞「力学形容詞」「空間形容詞」「数量形容詞」のアフォードダンス的解釈の傾向を示した。また、最後に、「評価性」の導入に基づく解釈の誘因現象について簡単に触れた。

¹ 本稿は、第1回日本語用論学会で口頭発表したもの(仲本 1998b)に、大幅に加筆訂正したものである。コメントを賜った先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。

² Grice (1967) の「会話の原則」や、その発展的継承である、S&W (1986) や Horn (1989) のなかで、いくつかの日常的推論が提案されている。その他に、日常的推論に関連して、次のような示唆がなされている。

a. 人間は論理的に妥当でない「誘導推論」を行う傾向がある (G&Z 1971)

b. 人間の日常用いる演繹規則はもっぱら「削除規則」である (S&W 1986)

³ 本稿は、「形容詞」を意味的に「属性」を表わすものと考え、形態的なイ形容詞とナ形容詞等の区分は問題にしない。また、「形容詞文」は、形容詞の「叙述用法」をさす。

⁴ Pustejovsky (1995) の生成語彙論は、フレーム意味論で提唱されている語彙情報を「QUALIA 構造」等の形式化された語彙概念構造のなかに取り込もうとしている。本稿のいう推論情報が、語彙の情報と文脈の情報にどう分配されるかは重要な問題となるだろう。

⁵ 「行為」「出来事」等のイベント類の区分は、緒方 (1994) が詳しい。

⁶ Talmy (1995) もイベントフレーム (event frame) という概念をほぼ同様の意味で用いているが、本稿で提案するような形容詞のイベントフレームは扱われていない。

⁷ Langacker (1995:51) は、イベントの概念を必要とする形容詞として、「評価」「難易」を表わす形容詞を挙げている。

⁸ ただし、これらの文も全く解釈不能というわけではない。それぞれ、「天体観測」や「木の成長」などイベントが文脈的に喚起されると自然な解釈が与えられる。

⁹ (4b) のような形容詞文の解釈は、仲本 (2000 forthcoming) で、形容詞の「局面解釈 (phase interpretation)」として取り上げた。

¹⁰ ただし、アフォーダンス的解釈を意味論的に内在化させた、「もろい (壊れやすい)」や「しつこい (離れにくい)」「しぶとい (諦めにくい)」のような形容詞もある。

¹¹ Gibson (1979) は、「もし地面が、水平で、平坦で、十分な広がりを持っていて、材質がかたいなら、地面は『支える』ことをアフォードする (ibid.:137)」という例を挙げている。この例のなかにも、多くの形容詞が用いられていることに注意したい。

¹² ここでいうイベントは、属性との関係から見て「結果行為」に特定化されており、篠原 (1994) のいう「前提行為 (より広い概念)」と異なる。

¹³ 筆者は、「主体」は言語表現上つねに顕在化すると考えていない。この意味で、本稿のいうアフォーダンスは、Ryle (1949) のいう「傾向性 (disposition)」の概念に近い。

¹⁴ 現在、筆者は、「力学認知」「空間認知」「数量認知」の三つを人間の基本的認知と考えており、本稿でも、これら三つの認知スキーマを反映する形容詞を取り上げる。

¹⁵ 本稿は、このような「xのアフォーダンス」という表現によって、xをイベントに対する「意味役割」と考えている。

¹⁶ 主語名詞が「複数性」を持つ場合、「破壊」や「変形」のアフォーダンスでなく、複数の物体の密着による「分離」のアフォーダンスを表わす (初山 1994:75)。

¹⁷ 同様のアフォーダンスを表わす形容詞として、物体の形状を表わす「太い (→折れない)」や「厚い (→割れない)」がある。

¹⁸ 「鋭い」は、「あの人は鋭い」のように、ひとの能力や性格・態度を表わすこともある。このように、一般に、ひとの性格・態度を表わす形容詞は、本稿でいう「主体」に対するもうひとりの主体の傾向性を表わすため、本稿は「動作主のアフォーダンス」という表現を用いた。ひとの性格・態度を表わす形容詞については別の機会にまとめたい。

¹⁹ この場合も、「塔の模型」について、「この塔は (先が) 鋭いから気をつけて」のような文脈が喚起されると、自然な解釈が可能である。また、「この塔は鋭く天を突いている」のように、(比喩的に) 破壊行為が喚起されると自然な解釈が可能となる。

²⁰ 「行為の難易度」の他に、力学形容詞は、次のような用法を持っている。

a. Aチームの優勝/B氏の当選は かたい

→ Aチームの優勝/B氏の当選は「確実」である

[初山 1994:81]

b. 佐藤君は 論理的な思考に 強い/弱い

→ 佐藤君は 論理的な思考をする「能力」がある

²¹ 本稿では議論しないが、感情形容詞「つらい」「くるしい」「平気だ」「大丈夫だ」等は、意味論的に視点の異なるもうひとつの力学形容詞として位置づけられ、同様に、「行為の難易度」を表わす用法を持つ。

²² 久島 (1991:66,69) は、位置形容詞のなかで「遠い/近い」は、このような到達のアフォーダンスが意味的に内在化されていることを示唆し、「あの柿は遠い」というときも、「手や竿で柿に接近しようという意味が感じられる」と述べている。

²³ 久島 (1991) は、「容器」のかわりに「場所」という概念を用いており、このような「場所」という概念自体が、次のような意味を持っていると述べている。

「場所」: ①周囲の自然と一体で、立体的な形を成していないもの

②ひとに活動の場を与える機能を持つ

[久島 1991:54,56]

特に、後者の規定は、「場所」のアフォーダンスといえる。本稿では、アフォーダンスを誘引するのは専ら形容詞であるとしてきたが、このように名詞の意味解釈から推論されるアフォーダンスを論じることも重要であろう。

- ²⁴ 基本的に「位置形容詞」である「深い」は、「どんぶりが深い」のように「空間を確保する」場合、「容器」として解釈されることがある(久島 1991:55,65)。
- ²⁵ 久島(1991:54)は、規模形容詞のなかで「広い/狭い」は、単なる「収容」のアフォーダンスでなく、「活動」のアフォーダンスが意味的に内在化されていることを示唆し、「この庭は狭い」に比べて、「この紙は狭い」は、その場での人間の「活動」を喚起しないため解釈が困難であると述べている。
- ²⁶ このような、同様の状況をべつの視点から述べる関係は、「双対性」または「双対関係」と呼ばれ、「図と地の関係」のひとつとして位置づけられるだろう。
- ²⁷ 「主体の行為」だけでなく「主体の経験」をアフォーダンスと呼ぶことには抵抗があるかもしれない。この問題については、稿を改めて詳しく論じる。
- ²⁸ 数量形容詞は、「出来事の回数」を表わす用法を持っており、「頻度」として解釈されて、語用論的に出来事の「生起可能性」を表わすことがある。次の例は、単なる出来事の回数でなく、そのような出来事の本生起可能性を表している。
- a. 文明は 多民族地帯に 生れることが多い → 文明は多民族地帯に生れやすい
 b. 日本は 地震が多い/よく起こる → 日本は地震が起こりやすい
- ²⁹ この解釈は、〈容器のスキーマ〉を喚起すると言ってもいいかもしれない。
- ³⁰ 生成語彙論のいう解釈の強制(coertion)(Pustejovsky 1991:59)と比較すると、ここでとりあげる現象は、解釈を促すという弱い強制力しか持たないため、便宜的に「誘因」という用語を用いることにした。
- ³¹ 「相関関係」は、ひとつの次元が大きくなると、もうひとつの次元もあいまって大きくなる、あるいは、小さくなるという関係を表わす。
- ³² 「十分」「すぎる」に対応する英語の too と enough は、「相関的程度表現(八木 1987:37)」と呼ばれ、統語的に too~to 構文、enough~to 構文として不定詞補文をとる。

参考文献

- Croft, W. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations - The Cognitive Organization of Information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Fillmore, C.J. 1982. "Frame Semantics." In the Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin.
- Geis, M.L. & A.Zwicky. 1971. "On invited inferences." *Linguistic Inquiry* 2, 561-566.
- Gibson, J.J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin. [古崎敬他(訳) 1985. 『生態学的知覚論—ヒトの知覚世界を探る』. 東京: サイエンス社.]
- Grice, H.P. 1989. Logic and Conversation. In P. Cole & J. Morgan.(eds.) *Syntax and Semantics* 3, 41-58. New York: Academic Press.
- 飛田良文, 浅田秀子. 1991. 『現代形容詞用法辞典』. 東京: 東京堂出版.
- 久島茂. 1993. 「日本語の量を表わす形容詞の意味体系と量カテゴリーの普遍性」. 『言語研究 104』, 49-91.
- Holland, J.H., K.J.Holyoak, R.E.Nisbett & P.R.Thagard. 1986. *Induction - Processes of Inference, Learning and Discovery*. Cambridge: The MIT Press. [市川伸一他(訳) 1991. 『インダクション—推論・学習・発見の統合理論へ向けて』. 東京: 新曜社]
- Horn, L.R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 市川伸一. 1997. 『考えることの科学—推論の認知心理学への招待』. 東京: 中央公論社.
- 国広哲弥. 1996. 「語義研究の問題点—多義語を中心として」. 『日本語学 5-9』, 4-12.

- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things - What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦他 (訳) 1993. 『認知意味論－言語から見た人間の心』. 東京: 紀伊国屋書店.]
- Langacker, R.W. 1995. "Raising and Transparency." *Language* 71, 1-62.
- 初山洋介. 1994. 「形容詞『かたい』の多義構造」. 『名古屋大学日本語日本文化論集 2』, 65-90. 名古屋: 名古屋大学留学生センター.
- 仲本康一郎. 1998a. 『力学的形容詞の認知言語学的考察－アフォーダンス的解釈をめぐって』. 修士論文, 京都大学.
- 仲本康一郎. 1998b. 「アフォーダンスに基づく発話解釈－力学形容詞はなぜ行為の難易度を表わすのか」, 2-9. 日本語用論学会第1回大会発表予稿集.
- 仲本康一郎. 1999. 「攻撃力と抵抗力を表わす形容詞－主体性という概念をめぐって－」. 関西言語学会プロシーディング 23, 10-20.
- 仲本康一郎. 2000 forthcoming. 「時間認知を反映する形容詞－形容詞の局面解釈をめぐって」. 関西言語学会プロシーディング 24.
- 緒方典裕. 1994. 「命題類への指示」. 『言語学論叢 13』, 39-59. 筑波大学一般・応用言語学研究室.
- Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge: The MIT Press.
- Ryle, G. 1949. *The Concept of Mind*. London: Huchinson. [坂本百大他 (訳) 1987. 『心の概念』. 東京: みすず書房.]
- 佐伯胖, 佐々木正人 (編). 1990. 『アクティブ・マインドー人間は動きのなかで考える』. 東京: 東京大学出版会.
- 坂原茂. 1985. 『日常言語の推論』. 東京: 東京大学出版会.
- 新地綾. 1997. 「形容詞〈重い〉の多義性に関する認知言語学的考察」. 『言語科学論集 3』, 77-104, 京都大学.
- 篠原俊吾. 1993. 「形容詞と前提行為－Tough 構文とその周辺」. 『実践英文学 43』, 87-100.
- Sperber, D & D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. [内田聖二他 (訳) 1993. 『関連性理論－伝達と認知』. 東京: 研究社出版.]
- Talmy, L. 1995. "The Windowing of Attention in Language." In M. Shibatani & S. Thompson (eds.) *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*, 235-287. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, J. 1989. *Linguistic Categorization - Prototypes in Linguistic Theory*. New York: Oxford University Press. [辻幸夫 (訳) 1996. 『認知言語学のための 14 章』. 東京: 紀伊国屋書店.]
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』. 東京: ひつじ書房.

引用文献の「聖書」は、日本聖書協会 1987. 『新共同訳 聖書』を用いた。